

教育実習に必要な人間力の涵養を目指す学外実習の 在り方について

—初年次から始める学外実習—

Cultivating Rich Humanity as Student Teachers for Teaching Practice:
From the First-Year Observation Practice at Elementary Schools

松本 由美
Yumi Matsumoto

キーワード：教員としての資質・能力、総合的な人間力、教育実習、参観実習

1. 本研究の背景と意義

教育実習は教育職員免許法に定められた、教員免許状取得のための必修科目である。「教育実践に関する科目」であることから分かるように、大学、また大学の教員養成課程において得られた知見を、実習校にて実践する現場実習科目であるため、他の教員免許状取得のための講義科目とは大きく異なり、教員養成課程の集大成のような役割を担う。また、実習期間は取得を希望する免許種¹⁾によるが、2週間から4週間の長期にわたり、さらに、実習校や当該教育委員会など外部との連携を必要とする学外実習でもある。学生にとっては、初めて教育現場の教育活動に参画し、仕事を覚えるインターンシップのような役割も果たす。

このように教育実習の一つの特徴は、長期に渡り、外部と連携し、教育現場に関わるので、準備から仕上げまでに相当の時間を要することである。大学2年次もしくは3年次の各種ガイダンスなどの準備段階から、教育実習を終了した後、実習を振り返り、補完し、卒業後教育職員として教育現場で活躍するための実践的演習をする「教職実践演習」を4年次に終え卒業するまでの、実に大学4年間の内、ほぼ3年間にわたり、教育実習のプログラムが展開される。もちろん、教育実習の単位も、これらのガイダンスに全て出席して、事前指導、「教職実践演習」の単位修得を以て、初めて認定される仕組みになっている。

また、教育実習のもう一つの特徴は—他の一般的なインターンシップと大きく異なる特殊性でもあるのだが—免許の取得前でありながら学校現場に入り、子供たちと関わりながら、現職教員の指導も得ながらではあるが授業をする機会も与えられることである。そしてさらに言うなら、実習当日からその対象である子供たちと直接対峙することである。従って、実習生は、職員室では実習生であるが、教室で子供たちにとっては実習初日から先生であるという、ダブルスタンダードを弁える必要がある。つまり、実習生は、実習中とはいえ将来を担う子供たちと直接関わるので、実習校の先生方のご指導を仰ぎながらも、先生としての責任と自覚を持って、細心の注意を払って実習に臨まなければならない。

一方、大学の教員養成課程は、学生を教育実習に送り出すために、先に述べたガイダンスの実施など学生指導はもちろん、実習校や教育委員会など外部との調整を行うが、それだけでなく、一人ひとりの学生を、教育実習という社会参画実習に送り出せるように育成していかなければならない。

まず、教育実習時に必要になる指導技術などは、各種の指導法をはじめとする講義科目や演習科目で基礎を習得させてから、教育実習に臨ませることができる。しかし、教育実習においては、先に述べた教育実習

現場の特殊性でもあり醍醐味でもある、子供たちとの関わりにおいて、人間力とも言える教員としての資質能力が、教育実習生にも必要であることは、自明である。大学は、教育実習生に、この人間力を育まねばならないが、後に「総合的人間力」の育成について述べるように、この人間力は、講義で知識を付けたからといって、一朝一夕に成るものではなく、知識を持ったうえで児童・生徒、さらには先生たちをはじめとする大人との関わりをもってこそ、育むことのできる力であると思われる。

大学はこの2点を、折に触れ学生に指導し、実習先の先生方とも子供たちともうまく関わられるように、言わば学生の教員としての人間力を高めていくことが肝要であると思われるが、これは講義科目の指導以上に細やかな指導と時間を要し、学生の人格やプライバシーにも関わる、デリケートな領域であることは自明である。

筆者が在籍する玉川大学では、いくつかのプログラムを用意し、この学生の教員としての人間力を高めることにも取り組んでいるのだが、本稿では、そのプログラムのうち、「参観実習」と呼ばれる、教員養成課程の1年生に行っている学外実習の、特に教員養成学部である教育学部では初年次教育と連繋させて行っている、その実践の様子を報告したい。

本稿の構成は以下のとおりである：まず2章では、中央教育審議会答申「新しい時代の義務教育を創造する」などの資料を参照し、教員としての人間力の要素を明らかにする。さらに視点を変えて、学校現場が教育実習生に望む教員としての資質能力を、明らかにして整理する。ここで、学校現場からの視点を取り入れることによって、大学が涵養しようとしている教員としての人間力が、学校現場からも望まれているものでもあることを確認したい。次に3章では、2章で明らかにした要素を中心とした総合的人間力を涵養するために、玉川大学が取り組んでいる学外実習の実践の実際を紹介する。また、学外実習を終えた学生の所感から、当該学外実習の役割を再確認し、学外実習に至るまでの指導の精緻化に役立てたい。最後に4章では、教育実習を終えた学生の所感から、教育実習以前に参加した学外実習が、教育実習時に及ぼした効果の一部を紹介する。5章では全体をまとめる。

2. 教育実習生に涵養すべき資質・能力

2.1 これからの教員に求められる資質・能力

まず、この章では教員に求められる資質・能力を確認し、教育実習生が目指す方向性を確認しておきたい。平成17年（2005）10月の中央教育審議会答申「新しい時代の義務教育を創造する」によると、優れた教師には、以下の3つの資質・能力が必要だと述べている：

1. 教職に対する強い情熱

教師の仕事に対する使命感や誇り、子どもに対する愛情や責任感など

2. 教育の専門家としての確かな力量

子ども理解力、児童・生徒指導力、集団指導の力、学級づくりの力、学習指導・授業づくりの力、教材解釈の力など

3. 総合的な人間力

豊かな人間性や社会性、常識と教養、礼儀作法をはじめ対人関係能力、コミュニケーション能力などの人格的資質、教職員全体と同僚として協力していくこと

これらの答申の文言や具体的な例示には若干の違いはあるものの、これからの社会の進展や、国民の学校教育に対する期待等を考えた時、これらの答申で示した基本的な考え方は、今後とも尊重していくことが適当である。むしろ、変化の激しい時代だからこそ、変化に適切に対応した

教育活動を行っていく上で、これらの資質能力を確実に身に付けることの重要性が高まっているものとする。

(下線は本稿筆者による付記)

(文部科学省HP「これからの社会と教員に求められる資質能力」より一部抜粋)

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/002/siryo/attach/1380585.htm

(最終閲覧日2022年8月1日)

上記の3つの資質・能力のうち、「3. 総合的な人間力」は、総合的と述べられ、「豊かな人間性や社会性」といった幅広い力や、一朝一夕では身に付きにくいと思われる「常識と教養」、相手との関係性をより良くする「対人関係力」や「コミュニケーション力」、さらに「同僚と協力していく」力など、多様な力の統合であり、教員養成課程の講義科目のみでは習得が難しいと思われる。また、こうした力は教育職員に限らず、社会人として重要な土台とも考えられ、「3. 総合的な人間力」は、大学が入学時から醸成に取り組むべき力と考える。本稿では、以降、総合的な人間力と称して論じていく。

2.2 「教育実習指導に関する協議会」に観る教育実習生に望まれる資質・能力

本項では、視点を変えて、大学生の教育実習を受け入れている小学校や中学校の校長先生方から観ている、教育実習生にこれから望まれる資質・能力を紹介したい。

玉川大学では、教員養成から就職までを統括する教師教育リサーチセンターが、年度の教育実習が終了した12月から1月にかけて「教育実習指導に関する協議会」を開催している。本協議会では、ご参加くださる教育実習生を受け入れていただいている複数の自治体の小学校、中学校の校長先生方から、教育実習を中心に大学が実習校を依頼して行う教育インターンシップ、また、大学を介さず学生が直接、各小中学校の募集に応じて行うボランティア実習や、次章で述べる、本学の教員養成課程の大きな特色の一つである「参観実習」についても、お話をいただいている。従って、本協議会は、あらゆる学外実習の受け入れ校としてのご意見を賜ることができる、大変貴重な機会となっている。

2021年度の「教育実習指導に関する協議会」でいただいたご意見のうち、教育実習生に望む資質・能力を集約すると、以下の6点であった（会議資料より本稿筆者が要約）：

- (1) ICT教育について、積極的な関わりを持つこと
ICTは協働的学習ツールであることを認識し、可能なところから使い始める
ICTのスキルを身に付けようとする
- (2) 情報モラルを守る人であること
SNS等の履歴が子供たちや保護者に検索されることもあるので、学生のうちから内容にも注意する
- (3) 子供たちと積極的に関わり、信頼関係の構築ができること
実習の機会を無駄にせず、子供たちに触れ合う積極性が必要
- (4) 学外実習時は社会人としての自覚を持って行動できること
実習校では実習生や学習ボランティアでも、学生ではなく先生として扱われる
- (5) ボランティアやインターンシップなどで、学校のことをよく理解している

教育実習だけでなく、教員として着任するときにも有効

(6) 特別支援の必要性を理解している

実習生も、支援が必要な生徒について予備知識をつけて、取り組んでほしい

以上6点である。実は、これらは、決して目新しいものではなく、毎回ご要望としていただくことも多く、大学としては、学内ガイダンス時にも、学生たちに指導するようにしている。しかし、教育実習以前に、ボランティアやインターンシップなどに参加して実践し、学生たち自身が体験から感じるのが最も効果的であると考えます。

また、教員になることを見据えて、職業適性を見極めることの必要性についても、毎年のようにお話をいただく。例えば、

(7) 子供と活動をするのが楽しく、苦勞を厭わずやり切る意欲がある方が、教育者になった時に楽であろう。

逆に、このような適性がなければ、将来的に教育の現場に携わることは困難を伴うという話も聞かれる。教育職員も職業の一つとして、できれば学生のうちに、その適性を見極めて、選択すべきものであるというご意見である。まさに、ご指摘のとおりであり、特に教育学部は教員養成学部であるがゆえに、教育職員を志して教育学部に入ったという学生が大半を占めるが、実は教員になることを望んでいない学生も一定数存在することを、特に我々大学の指導教員が理解すべきであろう。

また、学生自身が、自分の適性を掴み切れず、教育職員よりも他の職業に向いていることを自覚していない場合も散見される。特に、初年次の学生と接していると、教員養成学部でもあり、既に入学時に教育職員になることを目指している学生が大部分であるように見受けられる。しかし、進路選択に関しての考察の度合いはまちまちで、教職を目指したきっかけが望ましい教員への憧れの域を出ない者も多々見られる。教育職員の離職問題²⁾などにも鑑み、たとえ教員養成学部でも、できるだけ早い段階で、教員を含めた職業適性を考えられるような機会を与え、選択させていくことは必要であろうと考える。

そのためにも、初年次に、学外実践実習を行って学校現場を体験させ、学生に自分自身の気持ちに気づかせることは有効だと思われる。次章では、この学外実践実習の一つである、「参観実習」を紹介し、総合的人間力の涵養を包含する本学の学外実習を取り上げたい。

この「参観実習」については、「教育実習指導に関する協議会」でも、学生に自身の進路を確認させるという意味でおおむね好評を得ているが、一部、時期早尚であるとのご意見も頂戴している。いずれにせよ、実習校が教育機関であるが故、将来教育現場に立つ学生たちの育成も担っていただいているというご厚意の部分も多分にあることも忘れてはならない。

3. 教員を目指す大学生の総合的な人間力を涵養する学外実習の実践

本章では、まず、玉川大学の教員養成課程の特徴の一つである「参観実習」の概要を述べ、その実施に向けて教育学部が初年次教育の中でフォローアップ的に行うプログラムを紹介し、その中で、どのように総合的人間力の涵養を目指しているのか一部紹介したい。

3.1 総合的な人間力を育み、進路適性に気づかせる「参観実習」

3.1.1 「参観実習」の概要

玉川大学の教員養成課程における「参観実習」は、玉川大学教員養成課程の主管部署である教師教育リサーチセンターが、教員養成課程に在籍する全ての初年次生に向けて行う学外実習である。教員養成学部である教育学部の全1年生（春学期実施）と、文学部、農学部、工学部、芸術学部の各教員養成課程の1年生（秋学期実施）が、4人から10人程度の班に分かれて、引率教員とともに学生を受け入れていただく学校に赴き、基本的には授業や学級活動を参観させていただく。また、清掃などの課外活動や、休み時間は児童と一緒に活動させていただき、学校現場を体験させていただいている。

一日限りの実習であるが、各学生は引率教員の添削を受けたプロフィール（身上書）を作成し、大学を通じて実習校に前もって提出し、終了後は実習報告書を提出する。各学生班は班長、副班長を中心に事前に実習校を訪問し、当日の注意事項や準備するもの、スケジュールなどを実習校と打合せて、大学と引率教員に報告する。当日の集合場所や、移動のスケジュールなども、全て学生が主体的に決め、引率教員はあくまでも不測の事態に備えるのみである。

このように、大学が言わばお膳立てをして、学生が表舞台に立つ準備をした実習ではあるが、この「参観実習」への参加を通して、学生は、教育活動や教育現場を参観させていただきだけでなく、事前の挨拶に始まり、実習のお礼状まで、学校との関り方を覚え実践する。また、実習校では、朝の職員朝礼での自己紹介、校長先生の講話、各学級での自己紹介に始まる学級活動への参加、休み時間、給食、清掃活動などを児童・生徒と共に過ごす時間は、数十時間の講義にも匹敵する教育効果をもたらしてくれる。

3.1.2 「参観実習」に必要な総合的な人間力の涵養

しかしながら、初年次に行く実習であるため、参観させていただく時の心構えなどは、事前ガイダンスで学生に指導する必要がある。特に教育学部では、入学後3か月も経たない6月に「参観実習」を実施するため、学生は、教育ボランティアや塾講師などの経験もほぼ無く、教師の立場で児童・生徒と関わることを想像することができない。そんな学生たちを「参観実習」に送り出すにあたって、まず、教育現場や教育職員など教育についての予備的な知識と、総合的な人間力の涵養を視野に入れて、丁寧な指導を行わなければならないと考え、初年次教育の時間を使って実施している。具体的に紹介する前に、ここで再度、文部科学省HP「これからの社会と教員に求められる資質能力」から「3. 総合的な人間力」を引用し、その要素を抽出しておく。（下線は本稿筆者による付記）

3. 総合的な人間力

豊かな人間性や社会性、常識と教養、礼儀作法をはじめ対人関係能力、コミュニケーション能力などの人格的資質、教職員全体と同僚として協力していくこと

従って、玉川大学教育学部の初年次教育においては、4月から6月にかけて、これらの要素を身に付けさせるようにプログラムを組んでいる。具体的には以下、初年次教育資料より要約し、掲載する。

(1) 「参観実習」に向けての身構え・物構え・心構え：常識と教養、礼儀作法

まず、初年次教育の授業を使い、総合的な人間力として最も基本的なものと思われる、常識、礼儀作法を指導する。「参観実習」時でも、教育実習と同様に、学生が実習校に電話をかけて訪問し挨拶し、メールを使って学内外の報告や連絡を行う。初年次教育では、電話のかけ方、訪問する際の服装や身だしなみ、メールを送る時のマナーや基本的なメール書式について、教師教育リサーチセンターが開催するガイダンスを終えた直後に、初年次教育でも重ねて指導を行う。時間の許す限り具体的に行うこと、そしてなぜそのようなマナーが求められるのか、すなわち服装や言葉遣いは、相手に対する感謝の気持ちを表現する手段であることを、

学生たちに伝えるように心がけている。

学生たちは、指導を受け、実際に初めて訪れる実習校に電話をかけ、訪問して打合せを行い、実習後には、挨拶状を認め感謝の気持ちを伝えることができる。常識的なふるまいや、礼儀作法は、習うだけでなく、実践できるのが重要であるが、なぜそうでなければならないのか理解し、感謝の気持ちから、自然にそのように振る舞えるようになっていくことが重要である。

(2) 教育についての予備知識を提供する

前段で述べたような、いわゆる一般常識や社会のどの場面でも求められるような礼儀に加え、教育現場やそこで行う実習時に求められる振る舞い方を指導することも重要である。

・教育職員になるまでの歩みの見通しを立てさせる

教育学部の初年次教育では、まず、学部の教職担当が卒業し免許を得て着任するまでの見通しを立てさせる。大学は4年間の学期に沿った履修計画や学外実習の把握をし、その節目に合わせた目標を立て、自身の学修計画を立てるためには、まず見通しを立てることが重要だと考えるからである。「教職課程受講ガイド」を示しながらどのように学修を進めていくのか講話をしてもらうのが通例だが、1年終了時、2年終了時、3年終了時、4年終了時、それぞれの節目にあたる先輩のインタビュービデオを放映しロールモデルを提示したこともある。また、今年度の幼稚園教諭・保育士を目指す学生たちに向けた授業では、実際の園と中継して行っていた。いずれも映像画像の放映が必要となるので、快くお引き受けいただけるのは、偏に先方のご厚意によるものである。こうして、1年生は「参観実習」の前に予備知識を得ながら、自身の学修の見通しを立て、その中における「参観実習」の位置づけを把握する。

(3) 対人関係能力とコミュニケーション能力

・「参観実習」での見方・立ち方、振る舞い方

さらに、「参観実習」では学生が一人で実際の教室に身をおいて参観させていただくので、立ち方座り方、何をどのような視点で観させていただくのか、事前に指導する必要がある。教師という立場で学校に入っただけの無い大学1年生であるから、参観させていただく時の、観察の視点も細やかに具体的に指導する必要がある。授業観察、人間観察、学校観察をさせていただく心構えを話しながら、何を考え観れば良いのか、指導していく。

・対話の仕方

「参観実習」では、観察するだけでなく参加することも実習校の先生方のご指導のもと、授業や学級活動など、児童・生徒と共に活動することも求めている。児童・生徒との対話は、学級に入った時の自己紹介に始まり、帰りの会でのあいさつで終わるが、休み時間などを利用して、大学生自らが話しかけ、たとえたった一日でも、児童・生徒との信頼関係を構築しようとするのが、重要であることも伝えておく。その上で、具体的に何を誰に話しかけるのかについては、実習当日、学生たちが教室に身を置き、自分自身で関わり方を考え、発見していくことになる。これは大学1年生にとっては、貴重で実習時間が短いだけ大変難しいことであるが、この、ある意味自分自身の心を、児童・生徒に向けて開いて信頼関係を作っていくことが、何より貴重な経験になるようである。

3.2 「参観実習」の果たす役割：実習受入れ校の所感

先に2章で紹介した「教育実習指導に関する協議会」において、「参観実習」についてもご意見や感想を賜れることもある。好意的な意見や感想がほとんどであるが、「参観実習」とは言え1年生では早すぎると

いう意見もないわけではない。以下に、簡単に紹介させていただく：

まず「参観実習」を1年生で行うことのメリットは、以下（1）から（4）の4点があげられた。

（1）継続的なつながりを持つきっかけとしても「参観実習」は望ましい

実際、本学の学生は「参観実習」をさせていただいた学校で、引き続きボランティアをさせていただくことは少なくないようである。学生にとっても、1日でも馴染みができた学校の方が、ボランティア活動等に応募しやすいのであろうし、また、実習校側も、学生の様子や「参観実習」の前に提出したプロフィールを見ていれば、ボランティア等の審査に資するのであろう。また、「参観実習」時、校長先生からいただく講話の中で、ボランティアなどで学校現場の経験を積むことの重要性をお話いただくことも多い。

さらに「参観実習」を行わせていただいた実習校で、教育実習も行わせていただく例もあり、「参観実習」は、まさに教育実習に備えるスタートアップ学外実習としての役割を果たしているようだ。教師教育リサーチセンターにおいて、実習校の配当を決定する際に、可能な限り学生の自宅の近隣になるようにしていることも、その後の実習校とのつながりを保てることにつながっているであろう。

（2）「参観実習」は早い段階で教育職員への適性を、学生自らが判断する材料となる

適性を判断しないまま着任し早期に1、2年で離職することは、本人にとっても、学校にとっても、さらに児童生徒にとっても辛い状況をもたらす。こうした事態を避けるためにも、「参観実習」で本当に教員になりたいのか判断できる材料を得ることは望ましい。

（3）「参観実習」で1年生が、学校現場を見に来るということが、特に若い教員にとって、良い刺激、励みになる

（3）については、実習受入れ校にとってのメリットとしていただいたご意見だが、大学生にとっては、年齢の近い先生方が活躍されている様子を見せていただける、良い機会にもなっている。

（4）生徒たちも若い人たちが来てくれると喜ぶ。

入学したての大学1年生は、教育実習生よりも児童・生徒に年齢が近く、中学生にとっては、意識し始めた自分の進路の先にある大学生像の、ロールモデルになるのであろう。逆に大学1年生にとっては、中学生を観ることで、自身の成長を実感することにもなるのであろう。

このように「参観実習」に好ましいというご意見をいただけることが大半であるが、先に述べたように、まだ判断するには早いというご意見があることも付記させていただく。

3.3 「参観実習」の果たす役割：学生所感に観る「実習を通して得られたこと」

「参観実習」を終了すると、学生たちは実習報告書を作成し、大学を通じて実習校に提出するが、この報告に頼らなくても、学生たちが楽しただけではない、何か重要なものを掴んだことが感じられる。実習当日引率をしていると、学生たちがたった一日で成長もし、自信もつけたことが感じられる。本当に現場の一日は、大学での講義の何十時間分にも匹敵すると思う。

学生たちは一体何を楽しみ、何を掴んだのであろうか。また、何か戸惑いを感じたことはあったのであろうか。学生の素直な感想を知りたく、簡単なアンケートを実施してみた。対象は本学の教育学部の1年生のうち、本稿筆者が担任をつとめるクラスの32名である。アンケートの使用目的と、個人が特定できないように配慮すること、成績を含め一切の不利益を被らないことを述べたうえで、以下の3つの質問をした。縮

め切り時間が短く10人程度の回答であり、あくまでも非公式のものである。しかし、回答を見ると、それぞれ楽しむだけではなく、戸惑いを感じつつも、それを問題意識としてとらえていることが分かる。質問は以下の3つである：

- ①「参観実習」の実習当日に、最もよかったこと、楽しかったこと
- ②「参観実習」当日で、戸惑ったこと、困ったこと、難しかったこと
- ③その他勉強になったこと

10件の回答のうち、紙幅の関係で3件のみ掲載する。なお、個人の特定を避けるために趣旨を損なわない程度に改変している。各回答の下線は本稿筆者による。

●《担当：小学校 特別支援級》

- ①最も楽しかったのは、体育の授業です。子どもたちがマット運動などで成功した時に報告してきてくれるのがとても嬉しかったです。
- ②休み時間子どもたちと遊ぶ時に、子どもたちが校内ではしゃぎすぎるのをどこまで注意していいかを悩みました。
- ③支援級学級の子たちはそれぞれみんな得意なことで苦手なことがあって、一人ひとりに寄り添った指導をすることが重要なことを学びました。

●《担当：小中一貫校》

- ①小学校の体育の授業を体験出来たこと。児童と一緒に実際の授業を受けて、コミュニケーションも取ることができた。
- ②中学のクラスでお昼を食べたが、中学生への話しかけ方が分からなかった。小学生の場合は児童側から話しかけてくれるが、生徒には自ら話しかけにいけないといけないと思った。
- ③小学校の体育の授業を体験したことで、小学校の教科担任制で体育の授業をやるのも良いと思えた。

●《担当学年：小学校3年》

- ①たくさんの児童達が話しかけてくれて、自分達の色々な話を聞かせてくれてとても楽しかったです。また、学校についても案内してくれたりして嬉しかったです。
- ②同時に何人もの児童が話してくれて、どうすればいいのか戸惑う時もありました。
- ③実際に先生が児童に指導している姿を間近に見て、楽しむところは一緒に楽しんで、叱るべきところはきちんと叱るというメリハリをつけていて、とても勉強になりました。

①の楽しかったことは、この3件だけでなく10件の回答者全員が児童・生徒とコミュニケーションができたことを挙げていた。②の困ったことに対する回答で多かったものは、話しかけ方が分からなかった場面があったこと、もう一つは叱り方、注意の仕方が分からないことであった。③の勉強になったことについては、児童に寄り添った指導、自分の進路選択、先生の指導の仕方など、それぞれの視点から観ていることが伺える。

4. 教育実習で得られた重要なこと（大学4年生のアンケートから）

上記1年生が教育実習までにどのような成長を遂げるのかについては、彼らの成長をまたなければならぬが、「視点」の変化を捉えるために、4年生で教育実習を終えた学生たちのアンケートの中で、上記「参

観実習」の③アンケートに対応する質問として聞いた「教育実習で得られた（ご自分にとって）一番大事なことは何ですか？」という質問への回答を先着順に紹介したい。いずれも、教職に就くことを志望しており、ボランティアや学外実習の経験も豊富であるから、回答の視点に迷いが無いのはもちろんのこと、いずれも児童に深い教育的愛情を持って寄り添いつつ、既に教師の視点で考えていることが分かる。

《実習で得られた1番大事なこと》

●人からの信頼を得るためには、自分から進んで行動し、その行動を通して少しずつ信頼を得ていくことが大事であるということ。児童に指導する前に自分の言動を見直し、児童の見本となっているという自覚を常に持つことが大事であると感じた。

●・授業も大切だが、一緒に遊ぶことも、児童理解や信頼関係構築において大切であること
 ・個別最適な学びの重要性
 ・叱るときは毅然とした態度で行い、メリハリをつけること

●目の前の子どもへの愛情

●子供を叱ることの難しさと大切さを学んだことです。

●ボランティアよりも教師の大変さを実感しましたが、子供の成長に直接関わることができる教師の魅力に改めて気づいたことだと思います。

児童は日々成長していて、それに一緒に喜べることがとても嬉しかったです！

今回は一部を紹介するにとどめた、上記を含めた教育実習後のアンケートはいずれ分析をして紹介したいと考えている。

5. おわりに

本稿では、これからの教師に望ましい資質・能力の一つである総合的な人間力が教育実習生にも求められること、総合的な人間力の涵養は技術の養成と異なり時間がかかるので初年次から始めるのが肝要であり、講義だけでなく実践する場が必要であること。その意味で初年次に行く「参観実習」を通じた丁寧な指導が功を奏していることを紹介した。

最後に、本稿で述べてきた「参観実習」も、教育実習も教育インターンシップもボランティアも、いずれも受け入れてくださる実習校があってこそ可能になる活動です。授業準備や児童・生徒の指導、校務とお忙しい中、将来の教員の育成も使命と言ってくださる、実習受け入れ校の先生方のおかげと、心より感謝いたします。

註

- 1) 本稿では特に断りの無い限り、玉川大学教育学部において小学校教諭一種免許状の取得を目指す学生を対象として論じる。
- 2) 「東京都の新採教員、年度途中の自己都合退職が増加」教育新聞デジタル版 2022年5月23日
<https://www.kyoiku-press.com/post-244096/> （最終閲覧日 2022年8月1日）

【参考文献】

- ・ 玉川大学教育学部1年教職担当（山田深雪・松本由美・武内麻美（当時））（2021）「初年次教育掲載資料」
- ・ 玉川大学教師教育リサーチセンター（2022）「第10回 教職課程委員会資料（2022年3月）」
- ・ 文部科学省（2005）中央教育審議会答申「新しい時代の義務教育を創造する」
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/002/siryo/attach/1380585.htm
（最終閲覧日2022年8月1日）
- ・ 教育新聞デジタル版「東京都の新採教員、年度途中の自己都合退職が増加」2022年5月23日
<https://www.kyoiku-press.com/post-244096/> （最終閲覧日2022年8月1日）